花つける堤に座りて

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花つける堤に座りて

【Ｎコード】
Ｎ４３０６Ｐ

【作者名】
蒲公英

【あらすじ】
母の再婚で、男の人が生活に入ってきた。違和感は、いつ解消されるんだろう？
少し内向的な思春期の少女が、揺れながら新しい生活を受け入れようとします。華やかでも賑やかでもなく、日常スケッチ風。大きな展開はありません。

新生活―1（前書き）

思春期は静かに訪れます。

新生活―1

うつくしき川は流れたり
そのほとりに我は住みぬ
春は春、なつはなつの
花つける堤に座りて
こまやけき本のなさけと愛とを知りぬ
いまもその川ながれ
美しき微風とともに
蒼き波たたへたり

―　室生犀星／犀川　―

犀川という川がどこにあるんだか、私は知らない。室生犀星という人が、どんな人なのかも知らない。小学校の頃、担任の先生が故郷の話を自慢げにした時に、誰も聞いていないのに暗誦した詩だから。

だから、私の「花つける堤」はここでいい。自分の家を覚えるために毎日散歩に出て、昨日ここを見つけた。川沿いの道は今、桜がたくさん咲いているし、足元にはカラスノエンドウやヒメオドリコソウが咲いている。

ここも充分、花つける堤だ。

引っ越してから一週間目の今日、私はまだ家にいる人以外の誰とも話していない。家にいるのは、母と母の夫。いつか、私の父だと言える日が来るのだろうか。

明日から、中学生になる。

「手毬、用意できた？」
鏡を覗きこみながら、母が聞く。もう、用意ならとうにできている。
制服の肩も胸もダボダボで、せっかくのチェックのスカートは膝よりも長い。すぐに小さくなっちゃうんだから、と採寸の人も言っていたけれど、あまりにも野暮ったい。スクールバッグは学校指定。
引っ越す前の友達も、今日は入学式の筈だ。みんなと同じ中学校に入って、入学式の帰りに制服でプリクラ撮りたかった。

学期の途中で転校するのは大変だから、と私の中学校入学を機会に母は結婚をした。転校どころか、姓まで変わった私はまだ、新しい呼び名で呼ばれたことがない。親戚のおばちゃんたちは、お父さんが出来て嬉しいでしょうと言うけれど、お父さんがいる生活を知らない私は、お父さんがいなくて寂しいって感じがわからない。
だから、母の結婚は他人が生活に入ってきたようにしか思えない。知らない男の人。
私のことを「てまちゃん」なんて呼ぶ。手間かけてごめんね。

新生活―2

入学式の後、教室で教科書など配布されてから、一度目のホームルームの時間があった。
「名前と出身小学校、それから軽く趣味などの紹介をしてください」
学校の先生って、無神経だ。私の出身小学校なんて、この学校で知っている人なんかいない。教室の中は既に、同じ小学校同士の固まりができている。
私の番が回ってきた。
「前島手毬、＊＊市の＊＊＊小学校から来ました。趣味は読書です」
良かった、名字を間違いなく言えて。初めの日から、自分の名前を間違えたヤツなんて記憶されるのは、まっぴら。

ホームルームが終わったら、隣の席のコが声をかけてきた。
「お引っ越ししたばっかり？どこに住んでるの？」
色黒の顔に、真っ黒な大きな目が柴犬に似てる。私が町名と番地を告げると、家が近いと嬉しそうに言った。
「今日、一緒に帰らない？あたしの他にも近い人、いるから」
人懐っこくて世話好き、学級委員タイプなのかな。明るい調子に安心して、一緒に帰る約束をした。
話をする相手が、一人できた。柴犬に似ている彼女の名は、長橋聡美という。

家が近所の何人かで一緒に帰った。途中から彼女たちは私の知らない話で盛り上がり、私は曖昧に頷いているだけになった。私と思い出を共有している人たちも、同じように盛り上がっているのだろう。私ひとりが、どちらにも入れない。
「前島さんって、なんて呼べばいい？」
いきなり、話を振らないでほしい。しかも答えにくい。今まで前の

名字からついたニックネームだったんだもの。
「手毬でいい」
「手毬寿司の手毬？」
そんな名前のお料理があったっけ。

私の名前は、写真でしか知らない父がつけたらしい。春に咲く小さな白い花、小手毬の手毬だ。私に生を授けた父は、その名前を考えた後、２年も生きてはいなかった。小さな子供を連れて毎日病院に通うのは大変だった、と母はある時ポツリと言った。手毬のパパは、手毬の写真をベッドからいつも見える所に置いていた、と。

新生活―3

「お友達、もうできた？」
入学式から先に帰ってきていた母が、私にコーヒーを出しながら言う。
「一日でなんか、友達になれるわけないじゃん」
大人って、子供同士が群れていることを友達って表現する。子供には「友達」と「知らない人」の2種類しかないって思っているみたい。母は、それはそうねぇと頷いた後、自分のコーヒーを持って食卓の向かい側に座った。
「コーヒーなんか、飲んでいいの？」
「一杯くらい飲んでもいいじゃないの、ケチ」
友達みたいな親子、親戚も友達も私たちをそう評した。
私も去年まではそう思っていたけど。

母の恋人を紹介されたのは、6年生になってからすぐのことだった。母よりも7歳も年下なので、友達のお父さんたちよりも遙かに若くて、イメージが狂う。その前から母はずいぶん綺麗になったし、帰りが遅くなるからと祖母の家で食事することが増えたので、恋人ができたことには気が付いていたんだけど、それで私と母の生活が変わることになるとは思わなかった。私自身が外で新しい友達を増やし、休日に母と過ごす時間が減っていたので、母の外出が増えることは、何でもないことだったのだ。

母に前島サンを紹介された日、私は警戒心でいっぱいだった。
「手毬ちゃんですか、こんにちは。」
彼は窮屈そうに膝を折って、私と目線を合わせた。私が知っていた大人の男の人は、親戚のおじさんと学校の先生だけなので、なんだかもの珍しい。

「君のお母さんとお付き合いしてる前島と言います。仲良くしてね」子供扱いしない口調が気持ちよかったので、前島サンと私は、すぐに仲良くなった。「いとこのお兄さん」くらいの仲の良さだけど。

前島サンと一緒の時も、母は私と接する時には普段通りにしようとしていた。それでも、時折見える甘えた仕草や拗ねたような口調は、私の知らない母だ。イヤな言い方をすれば、母の顔じゃなくて、女の顔。今まで協力し合って上手に回ってきたと思っていた母との生活は、表面上だけのように思えてしまい、私は母と「友達みたいな接し方」ができなくなった。

そして、先々月急に結婚が決まった。母のお腹に、新しい命が宿ったから。

新生活―4

どうしたら子供ができるのかくらい、私だって知ってる。授業にもあったし、友達や本からの知識だってある。母と前島サンがそんなことしてるなんて、想像したくもないけど、やっぱりそうなんだろう。ちょっとじゃなくて、かなり気持ち悪い。そうやって考えると、マンションの部屋割りで母と前島サンの寝室が私の部屋から離れているのは、間取りの都合だけじゃないんじゃないか、なんて余計に気持ちの悪い想像をしてしまう。思春期の子供のいる家は禁止、とかの法律ができればいいのに。

「てまちゃん、学校どうだった？」

帰ってくるなり前島サンはケーキの箱を食卓に置いた。入学のお祝いのつもりなんだろうか。母が入浴中なので、味噌汁を温めながら返事をする。

「まず、着替えてこないとお母さんに怒られるよ」

前島サンは、言わないと背広のまま食卓についてしまう。きっと、ひとりで生活していた時はその場でワイシャツとかを脱いで、そのまま食事していたんだろう。ドラマなんかで見る男の人の一人暮らしは家に帰ってもかっこいいけど、前島サンはパジャマ代わりのダサいジャージだ。そう思ってる私もスウェットの上下。一緒に生活するって、こんな格好を見せ合うことなんだな、と納得しちゃう。

前島サンがケーキをサーブしてくれたので、3人分の紅茶を入れた。母はツワリが長引いているとかで、私が母の分まで食べた。こんな夜中にケーキなんて食べたら太っちゃう。前島サンが一生懸命気を遣ってくれるので、そんなこと言っちゃいけない気はするんだけど。

前島サンをどう呼んだら良いのかわからないので、今は「ねえ」とか「あのさ」とかって言う。赤ちゃんが生まれたら、きっとその子は前島サンを「パパ」と呼ぶんだろう。その時、私は前島サンをどう呼ぶのかがわからない。赤ちゃんと一緒にパパって呼べれば、きっとそれが一番いいんだろうけど。私も前島さんになった今、いつまでも母の夫を前島サンと呼ぶのはあまりにも変だ。だけど、母にも前島サンにも、なんて呼んでいいのか相談しにくい。食器を軽く洗って、私は自室に引き上げた。ドアを閉めて、溜息をつく。居間でそんなことをしたら、母が気にするのを知っている。

新生活―5

朝、長橋さんと待ち合わせて学校に行った。今日は学校内のオリエンテーションだけの予定だから、帰りは早い。
「聡美って呼んでくれる？手毬って呼ぶから」
長橋さんは聡美に変わる。私も前島さんと呼ばれるより手毬と呼ばれたほうが嬉しい。
「手毬、部活決まってる？」
この中学校は、全員部活動に参加の規則がある。聡美は少年野球をやっていたので、ソフトボール部に決めているそうだ。私はスポーツは得意じゃない。
「美術部とか文芸部とかあるのかな」
「え？暗っ！文化部はよくわかんないや」
文化部って暗いのかと、ちょっとがっかりする。

道々少しずつ合流していって、学校につく頃には１０人くらいで一緒に歩いた。聡美は人気者らしく、常に誰かが聡美に話しかけてる。誰と誰が同じクラスだとか、好きな男の子がどのクラスだとか、そんなこと。
私がどこから引っ越してきたのかも聞かれたので、答えた。ただ、母が結婚したからだとは言わなかった。隠したわけじゃないんだけど、何か聞かれそうでイヤ。

学校内のオリエンテーションには図書室の紹介もあった。古い学校なので蔵書も古そうだけれど、司書の先生がちゃんといるし、校庭に向いた出窓がステキだ。部活動の説明会もあった。文化部で私が入れそうなのは、美術部か華道部しかない。運動の盛んな学校らしい。とりあえず、仮入部って期間に決めればいいらしいから、保留。暗いと言われたことがひっかかって、憂鬱になった。相談する

相手がいないって、結構しんどい。

帰宅してから、母が用意して行ってくれた昼食をとった後、本屋に行くことにする。待ち合わせて遊ぶような友達はまだいないし、テレビ見るのも飽きた。学校の図書室、早くカード作ってくれるといいんだけど。ジュニアコーナーの本をチェックしていたら、後ろから声をかけられた。

「同じクラスだよね？前島さんだっけ？」

顔は見覚えがあるんだけど、名前を覚えていなくて答えられない。

「私、相田って言うの。相田みゆき」

名乗ってくれると、とても嬉しい。

「前島さんは何を買いに来たの？私はこれ」

彼女が手にとった本は、私がもう読み終えたものだった。

「私、それ持ってるから貸そうか？」

「ううん、シリーズで全部買いたいから」

本の趣味が合いそうだね、と言い合って公園で一緒にジュースを飲んだ。話し相手がふたり目。

新生活―6

珍しく、母よりも先に前島サンが帰宅した。
「あれ？麻子さん、まだ帰ってきてないの？」
麻子っていうのは、母の名前だ。
「じゃ、僕が夕飯の支度しよう。てまちゃん、手伝ってくれる？」
着替えてキッチンに立った前島サンは、ものすごく不器用だった。
「今まで、ごはんどうしてたの？」
「コンビニとかお弁当屋さんとか？外食もしてたし。てまちゃん、上手だね」
私が包丁を使い、前島サンが洗い物担当になった。

今までも母と一緒にキッチンに立ったことはあるけど、窮屈だと思ったことはない。前島サンと一緒だと、なんだか動きにくい。母よりも大きい身体で、母よりも太い腕。ダサいジャージを膝までめくり上げてるから、すね毛のたくさん生えてる足が見える。
男の人の足って、汚い。
そう思ったら、一緒に料理するのが嫌になった。
「私、自分の部屋にいるから、お母さんが帰ってきたら呼んで」
前島サンは何か言いたそうだったけど、私は部屋に入ってしまった。悪いこと、したのかな。

前島サンが結婚したかったのは母だけで、私は必要のない附録だ。母だって、もしかしたら前島サンとふたりだけの方が幸せかもしれない。手毬がイヤだったら結婚なんかしない、と言った母だけど、生まれてくる赤ちゃんからパパを取り上げる権利は、私にはない。

前島サンは、良い人だ。私を邪魔だなんて思っていないのは、わかってる。でも、私が見えないところで、母と前島サンは私の知ら

ない言葉を話しているのだろう。私がいなければ、この家のいろいろな所で交わされる筈の会話。たとえば夕食のリクエストを、私ではなく前島サンから出すみたいなこと。母が私を大切に思ってくれてることも、ちゃんとわかってる。

今まで私の母だけだった人が、誰かの奥さんになったり、他の人の母になったりすることに、納得するための時間が足りない。

時間だけなんだろうか。

「てまちゃん、麻子さんが帰ってきたから、ごはんにしよう」

前島サンは、盛り付けも下手だった。

「徹君が作ってくれたの？ありがとう」

母が子供に言うみたいに大仰に礼を言っているのを聞きながら、私は茶碗の用意を始めた。

徹君、か。新婚さんなんだね、若干難アリだけど。

居場所を広げる―1

ホームルームでクラス役員を決めた。聡美は思ったとおり、学級委員に決定した。

「図書委員の立候補者はいませんか」

私、手を上げていいのかしら。複数候補で多数決とかだと、いやだな。あたりを見回して、誰も立候補者がいなかったから手を上げた。と思ったら、もうひとり。

「前島さんと相田さんね。他には？」

担任の先生が黒板に綺麗な字で板書する。じゃ、多数決でと先生が言いかけた時、相田さんが手を上げた。

「先生、引っ越したばっかりの前島さんを知らない人が多くて、多数決になりません」

「でも、全員同じ小学校から来た訳ではないでしょう？」

「このクラスで私と同じ小学校だった人はたくさんいるけど、前島さんにはいないんです」

びっくりした。多数決なら、自分でやりたい委員会に入れるのに。みんなのいる前で、先生に向かって堂々と自分が有利じゃイヤだと言った。相田さんって、かっこいい。本屋で会った時は、物静かに見えたのに。

「じゃ、ふたりで話し合って決めてください」

先生が話を譲ってくれたので、相田さんと私は教室の隅に寄って相談した。じゃんけんで、私の勝ち。

「ごめんね」

「前島さんが勝ったんだから、当然でしょ」

相田さんは静かに席に戻った。

昼休みに相田さんの席に行って、少し話した。

「相田さん、部活どこにするの？見学に行った？」
「あ、私は陸上部。走るのには自信があるし」
相田さんは何か気がついた顔になった。
「前島さん、もしかして一緒に見学に行く人がいないの？長橋さんと一緒じゃないの？」
「私、スポーツ苦手だから」
「じゃ、文化部？見学だけならつきあおうか？」
すっごく心強い。誰でもいいって言ったら失礼だけど、話し相手がいるのって嬉しい。少しずつだけど、私の居場所が広がっていく感じ。

みゅう、こと相田みゆきは、放課後の部活見学にちゃんとつきあってくれて、私は美術部に入部することに決めることができた。
「文化部が暗いなんて思ってないから」
みゅうが笑ってくれたから、ひとまず安心。
私って、単純かな。

居場所を広げる―2

クロッキー帳と６Ｂの鉛筆、練り消しゴム。一ヶ月の仮入部期間に必要なのは、これだけ。聡美につきあって貰って、土曜日に文房具屋で買物をする。一緒に歩き出すと、前島サンがこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

どうしよう。にこにこしながら手を振る前島サンに、どう反応したらいいんだろう。

聡美が「知ってる人？」と私の顔を見る。なんて説明して良いのかわからなくて、下を向いた。

「てまちゃん、僕は出掛けるけど、鍵持って出てきた？」

「持って来てない。お母さんは？」

「病院に行ってる。検診の日だから」

前島サンから家の鍵を受け取るときも、私は顔を上げられなかった。聡美がどんな関係だと思っているかと、そればっかり気になる。

「てまちゃんのお友達ですか」

前島サンが聡美に声をかけたとき、私は文房具屋の袋を抱いて、聡美の腕を引っ張っていた。

「一緒に住んでる人？親戚のお兄さん？」

聡美の質問にも答えられない。

まだ３０歳にもならない前島サンは、私の父には見えない。前島サンが、逃げた私をどんな気持ちで見ていたかなんて、考えたくなかった。

母が結婚したことは恥ずかしいと思っていない。前島サンが母の夫だっていうことも、恥ずかしいことじゃない。なのに、なんでそれを人に知られたくないんだろう。

自分の部屋で本を読んでいると、母が病院から帰ってきた。
「手毬、お菓子買ってきたからコーヒー淹れよう」
母は家にいるときの服に着替えると、私の向かい側に座る。
「徹君からメールがあってね、手毬に謝っといてって。外で声かけて悪かったってさ」
母の声の調子はいつもと同じ。私は下を向いて、首を横に振るしかなかった。
本当は、前島サンは謝らなくていい。私が帰ったときに鍵がないと困るって心配してくれたんだから。
だけど、でも、私は友達に前島サンを紹介したくない。

居場所を広げる―3

前島サンの顔が見られない。私はあの日以来、食事の時間しか自室を出ないようになった。母は何も言わないけど、時々私をとても困った顔で見る。困らせてるのは、私。

でも、私も困っているんだ。

私が前島サンを父だと思っていないように、前島サンも私を娘だなんて思っていないだろうし「いとこのお兄さん」くらいの仲の良さでしかないのに、家の中ではパジャマで顔を合わせてる。友達に誰かと聞かれたとき、母の夫なんて返事したらおかしいじゃない。だけど、前島サンに失礼だったことはわかってる。謝らなくてはいけないだろうか、と思うと部屋から出られないのだ。

入浴しようと洗面室に入ったら、前島サンが歯を磨いていた。ちょっとびっくりして後ずさったら、泡を吐き出してから小さな声で呟いた。

「てまちゃん、ごめんね」

場所を占領してることかなと思ったんだけど、意味が違うのかも知れない。頭のてっぺんまでお風呂に浸かりながら、前島サンの「ごめんね」を何度も反芻した。

日曜日には、みゅうと公園で待ち合わせして散歩した。好きな本がよく似ていて、今度本棚の見せ合いっこしようかなんて話をする。引っ越したばかりの頃に見つけた土手の桜は終わってしまったけど、カラスノエンドウやヒメオドリコソウだけではなく、ハルジョオンやムラサキケマンが咲き始めた。とても幅の狭い川だけれど、流れは緩い。みゅうは平たい石を選んで器用に水切りをして見せた。

「お父さんにコツを教えてもらった」

そう得意げに言うみゅうが、羨ましい。

学校ではずいぶん話し相手ができた。聡美の隣の席だと、聡美とおしゃべりに来た子が一緒に仲間に入れてくれるし、美術部に行けばクロッキーを見せ合える子がいる。部活動のない日は、下校時刻まで図書室で本が読める。出窓の隣の席に座って、目が疲れると校庭を見る。校庭で運動部のコ達が、大きな声を出しながら走り回っているのを見るのは楽しい。

委員会の当番の日は、司書の先生に指示されながら書架の整理をする。自分の部屋で帰ってくる誰かのことを考えているより、学校にいるほうがいい。

逃げてるのかな、と自分でも思う。

居場所を広げる―4

ゴールデンウィークだ。美術部の活動はなく、図書室にも入れない。運動部は活動しているので、聡美もみゅうも部活の隙間に遊べる程度で、私は家にいる時間が長い。そして、家の中には母と母の夫。

母は最近ダルそうに座っていることが多くなった。

「手毬、連休退屈じゃない？どこかへ出掛けない？」

「本、読んでるから退屈じゃない。最後の日にみゅうと映画に行くし」

普通に答えたつもりだったのに、母はとてもがっかりした顔になった。

前島サンが午前中だけ仕事、と出かけた日にリビングで母にいきなり聞かれた。

「手毬、徹君が一緒に住んでるの、イヤ？お母さんが結婚したの、本当はイヤだった？」

私が自室に籠もるようになってから、母はきっとずっと聞きたかったのだろう。とても真剣な顔で、怖いくらい。

「どっちもイヤじゃない」

私にできる返事は、本当にこれだけ。本当は私が「なんとなくヘンで気持ち悪い」と思っていることを説明しなくちゃいけないんだろうけど、どう言葉にすれば良いのかわからないし、母に伝わるとも思えない。

「ちょっと座って」

母には珍しい、命令口調。

ソファに座っている母の向かいに膝を抱えて座った。母の顔は怒ってはいない。どちらかと言えば、困って悲しそうな顔。

「お母さん、手毬に無理させてる？テレビも見ないで部屋にいるの、寂しくない？」
なんて答えたらいいのかわからないのに、こんな質問はずるい。
無理はしてるよ。だけど、それは嫌いだからじゃなくて。なんていうのかな、私の居場所が見つからないって感じなんだけど。
私は膝の上に顔を伏せて丸くなった。ソファの上からは、深くて長い溜息。
「徹君が一緒に住むのは、お母さんの都合だもんね。ごめんね、手毬」
確かに母の都合だけど、母が悪い訳じゃない。言葉にならなかった。
「たまには一緒にテレビ見ようよ、手毬」
私は首だけで頷いた。母がわかったかどうかは、知らない。

それでも前島サンが昼早い時間に帰宅すると同時に、私は散歩に出た。頭がぐるぐるする。9月の終わりに赤ちゃんが生まれてくるのは決まっていて、それを否定することなんてできないのだから、私が、自分をどうにかしなくちゃならないんだ。
だって、悪い人はいないんだから。

居場所を広げる―5

食卓を沈黙が支配しているなんて、良くない言い回しだろうか。3人とも黙ってテレビを見ながら食事をしている。テレビでは、人気のアイドルグループが踊りながら歌ってる。

「てまちゃんは好きなアイドルとかいないの？」

答えても、前島サンはそれが誰だかわからずに話が途切れた。私からは、前島サンへの話題も母への話題もない。学校の友達のことも、読んでいる本のことも、別に話したいとは思わない。小学校の頃は、あんなになんでも喋っていたのに。

「友達みたいな親子」と「友達」って全然違う。もう、友達みたいとも思わなくなっちゃったけど。

学校のどの先生が好きとか、誰かの髪型が可愛いとか。同じ年の友達同士なら当然の話題があって、それに賛成したり反対したりのお喋りができるのに、家でそんな話をしたって母には関係のないことだし、もちろん前島サンにも関係ない。読んだ本の感想を言っても仕方ないし、部活で何してるかなんていちいち言わない。

困ったな。

みんな、家でごはんの時って何を話してるんだろう。

「え？家で親となんか喋んなーい。話、合わないし、ウザイしー」

聡美の返事は明快だった。

「学校でだって話が合わないヤツとなんか喋んないもん」

それで、いいの？

「兄貴となんか、1年くらい口利いてない。ムカつくし」

ちょっとびっくりして、それから安心した。聡美みたいに家にも学校にも心配事なんてなさそうな人でも、親と話したりしないんだ。

「手毬って家の中でまでイイコ？」

逆に、そんな風に質問された。うちは、よそのおうちと違うから、なんて言えないけど。

そうか、話題がなければ無理して話さなくてもいいのか。そういえば、母とふたりだけだった時だって、ひっきりなしに喋ってたわけじゃないし。そう思うと少しだけ気楽になって、私はその日からリビングに顔を出せるようになった。

前島サンには、まだ謝れないけど。

リビングに出る―1

数学の宿題がわからなくなった。ｘとかｙとかが出て来る問題。
「これができないと、２学期から困るからちゃんと覚えるように」
先生は授業のおしまいに念を押していく。授業中はちゃんとわかっていたはずなんだけれど、宿題に手をつけると、ちんぷんかんぷん。もうすぐ初めての中間考査なのに。

「お母さん、一次方程式ってわかる？」
これってクツジョク的だって、大人はわかるだろうか。私は授業で理解できませんでしたって言ってるようなものだもの。
どれどれ、と覗き込んだ母は大仰に顔を顰めた。
「解けるけど、上手く説明できないわ、これ」
文章題のｘがどれに当たるのか、考え込んでいる所に前島サンが帰宅した。
「あ、徹君が帰ってきた。代わって！」
母は渡りに船の顔で席を外した。私は気分が逆なんだけど。

ワイシャツを腕まくりしてネクタイを外しただけの前島サンが隣に座ってプリントを手に取った。
「１４０円の箱に、１個６０円のミカンと１個８０円のリンゴを合わせて１２個つめ、ちょうど１０００円にしたい。ミカン、リンゴはそれぞれ何個ずつつめればよいか。」
うん、と頷いてメモ用紙を手に取る。
「てまちゃん、この問題の中でイコールのあとの数はどれだかわかる？」
「１，０００円」
メモにその数をいれる。
「じゃ、ミカンの数は？」

「わかんない」
「その、わかんない数がｘ」
「でも、リンゴもわかんない」
「全部で１２個だったら、ミカンの数を引けばいいんでしょ？」
前島サンは、ごはんも着替えも後回しにして家庭教師になってくれた。プリントの残りを全部終えて、答えを隠してもう一度、と言われた時はいやになったけど。

前島サンが着替えるために席を外した時、母が嬉しそうな顔をしているのを見た。
こんなことで良かったんだ。わからない勉強を教えてもらうくらいで、母は嬉しいのか。ジャージに着替えた前島サンもなんだか嬉しそうだ。私もなんだか気持が良くなって、遅いよと言われるまでリビングでテレビを見ていた。
誰も喋らないのに、居心地は悪くない。

リビングに出る—2

中間考査は前島サンの家庭教師のおかげか、平均以上の成績だった。中学校の数学くらいならいつでも大丈夫だから、と前島サンはにこにこと請け負ったあとに、母がいないときにこっそり英語はカンベンしてね、と付け加えた。それだけのことなのに、前島サンが少し近くに来たように思う。

私は父を知らないけれど、もしも生きていたらやはり勉強を教えてもらったのだろうか。それとも、聡美みたいに「うざいしー」なんて言うかな。

ある日、母が急に買物に行こうと私を誘った。

「急に背が伸びたから、着る物に困るでしょう」

新しい服を買ってもらえる、とついていくと下着売り場に連れて行かれた。

「そろそろ体育の授業でTシャツ一枚になるでしょう？」

今まで厚手のキャミソールを着ていたんだけれど、ちゃんと下着をつけなくてはと母が言う。

「体つきが丸くなってきたから、そろそろ生理が始まるよ。その用意もしとこう」

小学校で初潮があった子もずいぶんいたけれど、私はまだだ。まだで良かった。本当は一生そんなものがないほうがいい。小学校での授業は男子も一緒で、先生は子供を作るための大切な機能だと真面目に説明したけれど、その機能だけでは子供なんかできないんだし。買ってもらった生理用品は、チェストの一番奥の見えないところに入れた。

「あ、手毬、その服可愛い。買ったばっかり？」

おしゃれな聡美にそう言われて、嬉しい。聡美と遊ぶのは、聡美

の家かファミレスに大勢で行くか。はじめに誘われた時、子供だけでファミレスなんか行くの？ってキョロキョロして笑われたけど。

「去年の服が全部着られなくなっちゃったから」

そういうと、みんなが口を揃えていいなぁ、と言う。

それから、一年でどれくらい背が伸びたかの話になった。もう大人の女の人みたいな体型になっている子が、１センチも伸びていないと言い、一年で急に１０センチ近く伸びて、靴が２サイズ変わったなんて言う子もいる。

今はまだブカブカの制服は、あとどれくらいでぴったりになるんだろう。

リビングに出る―3

図書委員の仕事で書架の整理をしていると、みゅうが遊びに来た。雨なので部活が中止になったと言う。みゅうは司書の先生と仲が良い。大人と普通にお喋りできるって、すごいな。みゅうが私だったら、前島サンも気を遣わなくてよかったかも。

「次の図書委員推薦の本、前島さんに紹介文書いてもらうからね」

司書の先生に渡されたのは、「冒険者たち」という本だった。

「あ、これ知ってる！ガンバの冒険！」

みゅうが声をあげると、司書の先生が笑い出した。

「そんな古いアニメ、よく知ってるわねぇ」

「お父さんが好きなの。うちにＤＶＤが揃ってる」

あ、またお父さんがって言ってる。

「みゅう、お父さんと仲いいね」

「普通だよ。手毬はお父さんと仲が悪いの？」

本に気をとられたフリをして、聞こえないことにした。

お父さんは、いません。

前島サンと少しだけ話ができるようになってから、よく考える。お父さんってどんな感じなんだろう。いなくて当たり前だったから、今まで全然考えなかった。小さい頃は母に「なんでお父さんがいないの？」なんて聞いたこともあるけど、それは他の人が持っているものを私は持っていない、くらいの不公平感だった気がする。今、お父さんの立場にいる人は確かに前島サンなんだけれど、彼は今までの私を知っているわけじゃない。小さい頃から一緒に生活してる大人の男の人って、どんな風なんだろう。写真で見る父は今の前島サンより更に若くて、赤ちゃんの私を優しい顔で抱いている。もしも他界しなかったのなら、優しい顔のままで私と接していたのだろうか。

それとも。
知らない自分は、今の自分よりも幸福に見える。そんなわけないんだって、わかってるけど。

美術部で、水彩のイラストを仕上げる。青を主体のグラデーションにして、迷路に迷い込んだみたいにしたら、やけに淋しい絵になった。どこかに元気な色をいれようとイラストを眺めていると、顧問の先生が覗き込んだ。
「前島、水彩に上書きは無理だから、何か貼ったらどうだ？」
和紙や色紙が差し出される。
「イラストに、何か貼ってもイラストなんですか？」
ヘンな質問。先生の答えは簡単だった。
「切り絵も貼り絵も、絵は絵だよ。自分が満足できればいいんだ」
先生が言ったことはそれだけで、それ以外の意味なんてない筈なのに、他のことを言われた気がした。

リビングに出る―4

母の腰周りが急に大きくなった気がする。いつのまにか緩めの服じゃなくて、ジャンパースカートみたいなのを着るようになった。

「この頃、赤ちゃんが動くのがわかるのよ」

母は大事そうにお腹を撫でる。そして、最近いつも眠そうにしている。9月のおしまいには生まれてくる、私の妹か弟。まだ実感は湧かない。

実感が湧かないのは、前島サンも同じらしい。

「あ、今動いた」

母がそんな風に言っても、前島サンはよくわからない顔をしている。時々母の足をマッサージしていたりはするけど、そんな時は見ないことにしている。なんだか妙にいやらしい気がして。

別に、いやらしいことをしているわけじゃないんだけど。この人たち、結婚してるんだなって感じかな。男の人が母の足や肩に触れているのを見るのが、とてもヘン。私が母のお腹にいた時、私の父も母にそうしていたのだろうか。

通勤が辛くなってきたから、と母は勤務時間を調整してもらったらしい。私より早く家を出て、夕方早くに帰ってくる。電車の中で座るためらしい。だから、朝食は前島サンとふたりでとる。

寝起きの前島サンが、新聞を読みながらトーストを齧っているので

「新聞の上にパン屑が落ちてる」

そう注意すると、驚いたように顔をあげた。

「てまちゃん、麻子さんと声がそっくりだね」

「親子だもん」

「そういう意味じゃなくて」

少し考える風な顔になって、それから思い当たったように言う。

「声のトーンが大人っぽくなったんだ、ここ何ヶ月かで」
私にはわからない。ただ、前島サンに観察されてる気がした。なんだか、フクザツ。

リビングに出る―5

お喋りしすぎて、帰りが遅くなる。珍しく、運動部の子たちと帰りが一緒になって、大勢で歩いてきた。聡美の家の前だとはいえ、7時半。聡美のお父さんが帰宅したので、遅くなったと気がついたのだ。

まずい、怒られるかな。早足で歩いていると、向かい側から前島サンが自転車で走ってきた。ワイシャツのまま、ネクタイだけはずして。

「何してたの！探しにいくとこだったんだよ！」

いきなり怒られたら、謝ることなんてできない。

「ちょっと遅くなっただけじゃない」

多分、すっごくふてくされた顔したと思う。

前島サンは携帯で母に私を見つけたと連絡している。

「だって休みの日に友達と遊びに行ったときなんて、もっと遅いし」

そう言うと、前島サンは大きく溜息をついた。

「あのね、てまちゃん。学校の帰り時間は決まっているものでしょう。そこから外れたら、心配するんだよ」

たとえば友達と遊びに行く時は、何時までに帰ってきなさいと行く前に指示される。それより遅いと、お母さん同士で連絡を取り合っているらしい。知らなかった。道理で「誰と行くか」をしつこく聞かれるはずだ。

自転車を押しながら歩く前島サンと並んで歩くのは、迎えに来てもらって悪いと思っているから。

知ってる人に会いませんように。前島サンは、言いにくそうに話す。

「言いたくないけど、女の子だと他の事件に巻き込まれる可能性も

あるしね」
他の事件ってもしかして。
「中学校の制服が好き、なんて男もいるわけだし」
最近、こんな注意がとても多い。女の子って、すごく損な気がする。
「でも、そんなことされたって話は聞いたことないよ」
私がそう言い返すと、思いの外強い口調で返された。
「そんなことになってからじゃ遅いから、気をつけるんでしょ？心配かけさせないでね」
ちょっと叱られたようだったけど、それは悪い気分じゃなかった。

家に帰ると、母からのお小言が待っていた。
「学校にまで連絡入れるところだったのよ！」
怒る母をおさめるために、とりあえず「ゴメンナサイ」と言う。
「麻子さん、謝ってるんだから、ごはんにしよ。てまちゃん、着替えといでよ」
前島サンに促されて、自分の部屋に着替えに入った。庇ってくれたんだ。

リビングに出る―6

いつの間にか、梅雨に入っていた。雨が降ると、運動部の活動のない校庭はとても静かになる。図書室の出窓からは、なんだか寂しい眺めだけれど、キライじゃない。部活が休みのみゅうと図書室で本の話をする楽しみがある。教室でそんな話してると「暗い」なんて言い出す子がいるし。

どんな話なら明るいんだろう。アイドルの話、好きな男の子の話、先生の悪口。ペットの話、家族の話・・・まさかね。

美術部では、ずっと石膏デッサンをしている。ヴィーナスの頭部じゃなくて、卵かなんか掴むような形の手だけど。光の当たり方によって違う絵になっちゃうなんて、初めて知った。

クロッキー帳は2冊目になった。初めの頃より、鉛筆を柔らかく使えるようになったのが自分でもわかって嬉しい。自分にできることが、少しずつ増えてゆく。たいした変化じゃないけど。

最近、前島サンがリビングにいても、あんまり緊張しなくなった。でも、私から話しかけたりはできない。あいかわらず、なんて呼びかけたら良いのか、わからないから。蒸し暑くなってきて、ダサいジャージからダサい半ジャージに変わった前島サンの足はやっぱり見たくなくて、Tシャツから出ている太い腕も嬉しくはなくて、目を逸らしちゃうけど。

お風呂からシャツを着ながら出てくるのもやめて欲しい。最後までちゃんと着てからにして欲しいんだけど、それはまだ言えない。母は気にしてなんかいないようなので、母に言ってもらうのも躊躇われるし。

前島サンが帰宅する前に夕食の支度を手伝っていたら、母は手を

動かしながら言った。
「手毬の声、お母さんと似てるんだってね。自分たちじゃわからないけど」
「うん、顔は似てないのにね」
そう返すと、母はちらりと私の顔を見た。
「手毬はパパ似だから」
さらっと言われた言葉が、却って興味を引いた。
「どんな人だった？」
母はさすがに答えにくそうに、言葉を選びながらゆっくり言う。
「優しい人、だったよ。真面目でね、ちょっと抜けてて」
それから、私しかいないのに少しだけ声をひそめて続けた。
「徹君とよく似てた。徹君の方がちょっと元気がいいかな」
ナイショねと笑った母は、前の「友達みたいなお母さん」だった。
そうか、父はあんな感じの人だったのか。一度でいい、記憶に残る場所にいてくれたら良かったのに。

抗えない変化―1

期末考査を翌週に控えた朝、初潮をみた。うっすらと汚れた下着を見た時、後ろから殴られたみたいな気分になった。一生いらないと思っていても、それが無理だってことは知ってるのに。母は出勤してしまったあとで、前島サンしかいない。手当ての仕方はもちろん知ってる。

知ってるけど。

どうしよう。

バスルームに飛び込んで、頭からシャワーを浴びた。汚れた下着と自分の身体を何度も洗って、シャワーの下に座り込む。

いやだ！いやだ！

何がいやなんだか、自分でもよくわからない。

ずいぶん長いことシャワーを浴びていたのに、前島サンはまだ家を出ていなかった。心配そうな顔をしているのがわかる。

でも、顔を見られたくない。誰の声も聞きたくない。

私はそのまま自分の部屋に入った。ドアの外から、前島サンの声が聞こえる。

「てまちゃん、遅刻するよ？具合が悪い？」

「行きたくない」

「何かあったの？」

「何もない。行きたくない」

しばらくドアの向こうに気配があったけど、電話で何か話す声が聞こえた。

「てまちゃん、麻子さんだから。休むんなら学校に連絡しないとい

けないでしょ」
ドアを小さく開けて、電話の子機を受け取った。母の声を聞いたら、気が緩んで泣きたくなった。生理と言ったきり、言葉が出ない。
―お母さんがいない時に来ちゃった？タイミング悪かったね。使い方、わかる？
頷いても、電話じゃ見えないんだけど。
―病気じゃないんだから、学校には行きなさい。遅刻の連絡はしておくから。
早いテンポでてきぱき言われると、逆らえない。
―落ち着いたら、ちゃんと支度するのよ。あと、徹君に代わって。
「教えちゃダメ！絶対言わないで！」
受話器越しに母の溜息が聞こえた。
―わかった。言わないから、代わって。心配だけ解いてあげないと。
ドアに隙間をあけて受話器を差し出すと、前島サンの手がすぐに伸びてきた。ドアの前にいたのかな。聞かれちゃったかもしれない。
「僕はもう、会社に行くからね。てまちゃん、戸締りよろしく」
前島サンが玄関を出る音を確認してから、私はノロノロと部屋を出た。

抗えない変化―2

連絡をしてあるとはいえ、学校に遅刻するのは恥ずかしい。2時間目が終わった中休みの時間を狙って登校した。どうしたの、なんて寄ってこられても嘘ついちゃうし。授業が終わってから、部活にも出ないでひとりで家に帰った。誰にも話しかけられないように気をつけながら。

ベッドに寝転がっていると、母が帰宅した。
「ただいま。お腹痛くない？」
私の部屋のドアをあけて、ケーキの箱を見せた。
「お茶飲もう。ちょっとだけ、お祝いしない？」
「おめでたくないもん。でも、ケーキは食べる」
そう言うと、母は軽やかに笑った。
「お母さんも、昔そう思ってた。だから、お赤飯は炊かないよ」
「お赤飯なんか炊いたら、家出する」
母と差し向かいでケーキを食べながら、私は仏頂面をしていた。

「手毬が大人になって、子供を産むことができるようになったってお祝いだからね」
そんなこと、今できなくてもいいのに。
「お母さん、女で良かったって思ってる？」
そう聞くと、母は真面目な顔をした。
「手毬を産んだ時に、そう思った。良かったって思ったよ」
答えたあと、母はとても照れた顔をして、それを見た私も照れくさくなった。
食卓をはさんで照れあう親子って、ヘン。
「さて、夕食の支度。手伝ってくれる？」
母は照れ隠しのように立ち上がった。

夕食の支度が済んだ頃、前島サンが帰ってきた。朝の件、謝らなくてはいけないだろうかと思っていたら、いきなり書店の袋を差し出された。
「会社の女の子が面白いって言ってたから。僕の好みじゃないけど、てまちゃんが読むかと思って」
渡されたものを受け取っている間に、前島サンは着替えるために寝室に消えた。
母が後ろで吹き出した。
「考えたわね」
母の顔を見返すと、笑いながら解説してくれた。
「ヤツアタリしたって手毬が気にしてたら、気まずいと思ったんでしょ」
そうか。これならアリガトウだけで済むのか。
大人って、すごい。でも、ヤツアタリだってわかってるってことは。
「お母さん、喋ったでしょ」
「喋ってない、喋ってない」
絶対、喋った。その晩、私は前島サンの顔が見られなかった。

抗えない変化―3

生理が始まっても、別に急に大人になるわけじゃない。前島サンが知らないフリをしていてくれるので、翌日の朝はそれほど気まずくはなかった。ただ、下着をお風呂で洗濯するクセがついただけだ。今まで洗濯機に放り込むだけだったものは、お風呂で洗ったあとに私の部屋の中で小さなハンガーに吊るされるようになった。

それだけが表面の変化らしい変化で、期末考査は少しだけ順位を落として終わった。

運動部は3年生が引退しつつあり、逆に1年生が活気づいてきた。図書室の出窓から見える校庭で、聡美やみゅうが走り回っているのを見ると、いいなと思う。私もスポーツが楽しめるタイプなら、もっと違う何かができたんだろうな。

スポーツが得意な子って、なんであんなに明るい性格に見えるんだろう。美術室で石膏デッサンしてるより、ずっと生き生きしてる気がする。

「私は文化部って頭良さげでいいなっていつも思うんだけど。何時間も絵なんて描いてられない」

みゅうはそう言って笑った。私より、期末考査の順位は上だったクセに。

夏休みの少し前、みゅうの家に遊びに行った。小学生の妹と一緒の部屋なの、と話には聞いていたけど、これって結構大変。一部屋に勉強机組み込みのロフトベッドが2台。それを除くと歩くスペースしかない。

「手毬はひとりっこだもんね。いいなあ」

そう言われたら、ちょっと言ってみたくなった。

「私も兄弟、できるんだ。9月のおしまいくらいに」

今まで、誰にも言わなかったんだけど、みゅうにだったら言ってもいい気になった。
「手毬が赤ちゃん抱っこするのって、想像つかない」
みゅうの本棚から、読んでいない本を何冊か借りた。
「今度、手毬の家に行ってみたい。夏休みに遊びに行っていい？日曜日は部活ないし」
日曜日は、前島サンが家にいる。でも、ここで断われない。
「うん、来て」
前島サンが出かけてくれるのを祈ろう。

友達を招く―1

退屈な夏休みが来た。運動部の子たちは、毎日部活があって忙しそうだ。聡美なんか、合宿まであるって楽しみにしてる。

美術部はスケッチのハイキングが一回。しかも、家から歩いて行けるところだ。秋の文化祭までに作品をひとつ完成させるようにと指示されたけど、週に2回の活動日は、お喋りだらけのだらだらした活動。

図書室の解放日も来る人はちらほらで、司書の先生も張り合いがなさそう。

宿題は、やる気まったくなし。読書感想文と美術のポスターだけを最初の一週間で終わらせたら、あとはどうでも良くなった。昼間にテキスト開いたって、問題なんか読んだ端から忘れちゃう。

「毎日ゴロゴロしてると太るよ、手毬」

「洗濯物取り込んだり、お風呂の掃除したりしてるもん」

最近、背伸びしたり屈んだりの動きができなくなったらしい母は、ずいぶんふっくらしてきた。朝方に足が攣ることが多いという。8月の終わりから産休に入るので、仕事が忙しそうだ。

みゅうが家に遊びに来る。私の祈りは神様に届かなかったらしく、前島サンは在宅だった。みゅうなら、きっと大丈夫。よそのおうちと違うなんて、バカにしたりしない。

自分に言い聞かせてもやっぱり緊張して、私は朝からそわそわしていた。だけど前島サンにも、顔を出さないでとは言えなくて、やっぱり遊びに来てなんて言わなければ良かった、と後悔し始めた頃にチャイムが鳴った。

玄関に一番近く座っていた前島サンが、気軽に立ち上がった時に気がつく。いつもの半ジャージと首の伸びたTシャツ、つまりパジ

ャマのまま。しかも、ヒゲ伸びてるし。思わず、シャツの裾を掴んだ。

「その格好で私の友達の前に出ないで」
「え？だって、コンビニくらいまで、いつもこのままだけど」
「ダメ！着替えてきて！」
私、前島サンに、こんなに強い口調でモノを言ったのは初めてかも。ハイハイ、と返事をして寝室に向かった前島サンは、妙に嬉しそうだった。

友達を招く―2

私と前島サンがじたばたしているうちに、みゅうが母に案内されて入ってきた。すぐに私の部屋に行こうとすると、母にひきとめられた。

「まず、紹介ぐらいするものよ。お名前は聞いたことあるけど」

リビングでそんなにゆっくりしてたら、前島サンが着替え終わって出てきちゃう。できることなら、見ないで欲しい。だけど、みゅうはそんなことは知らない。

「相沢みゆきです。手毬ちゃんと同じクラスで、仲良くしてます。陸上部です」

いつも通りのハキハキした口調でみゅうは自己紹介をする。

寝室のドアが開いた。あれ、ジーンズにウォレットチェーンさげてる。どこかに行くつもりかな。

「あ、てまちゃんのお友達？ごゆっくり」

そう言ったあと、今度は母に向かって「ちょっとそこまで」と言いながら出て行った。みゅうを先に部屋に案内してから、麦茶を運んで私も部屋に入った。

「手毬のお父さん、若い！」

みゅうの第一声は予測どおりだった。部屋の中の感想とか、みゅうが持ってきたCDの話題じゃなくて。ここで聞こえないフリなんか絶対できない。言っちゃっていいかな。黙ってると余計ヘンかな。

「本当のお父さんじゃないもん。小さい時に死んじゃったから。お母さんが今年、結婚したの」

みゅうは一瞬、なんて答えたらいいのかわからない顔をした。でもその後に出た言葉は、みゅうらしいはっきりしたものだった。

「結婚したんでしょ？嘘のお父さんじゃないじゃん」

あ、そうか。本当の反対は嘘か。
「いいな、若くて優しそうなお父さん。うちなんかスイカ入ったみたいなお腹してるよ」
スイカが入ったお腹を想像したら、笑えた。
でもね、そのお父さんはみゅうが生まれてから、ずっと知ってるお父さんでしょ。私は違うんだよ。今、父だなんて思えないし、「知らない男の人」が「一緒に住んでる男の人」になっただけ。
もちろん、そんなこと口に出しては言えないけど。

友達を招く―3

「お母さん、何かお菓子ない？」
私が部屋から出たのと、前島サンの帰宅はほぼ同時だった。両手に大きいスーパーの袋。
「何、それ全部お菓子？」
母がびっくりした声をあげる。
「昨日の晩、テレビ見ながらそこにあったお菓子、全部食べちゃったから」
それで出かけたのか。それにしたって、すごい量。
「そんなにたくさん食べないよ」
「うん、気がついたら籠いっぱいで。女の子がどんなの好きかわからないし」
ちょっと困った顔がおかしい。
「ありがとう」
素直に言葉が出たからか、母と前島サンは顔を見合わせた。

本棚とCDラックを熱心にチェックしている、みゅうを誘って外に出ることにした。いつもの土手に着くと、クローバーの花がたくさん咲いている。小さい子じゃないから、それで冠を作ったりはしないけど。
四葉、ないかな。
「四葉ってさ、見つけた人がラッキーなのかな。持ってる人がラッキーなのかな」
みゅうが大真面目に不思議そうに言うので、笑ってしまう。そう言えば、そんなこと考えたこともなかった。きれいな川じゃないのに、水遊びしている人たちがいる。
まだ、オシメしているような小さな子供とお父さん。2年後の前島サンかな。それで、びしょぬれになって帰ってきて、母に怒られ

たりして。その時は私もリビングにいて、一緒に笑えるといい。父と似ているっていう前島サンは、私が父にしてもらう筈だったことを、きっと私の弟か妹にするだろう。
私はどんな気持ちでそれを見るのだろうか。

「遅くまでおじゃましました」
みゅうが帰ったあと部屋を片付けていると、ドアがノックされて前島サンがひょいっと顔を出した。前島サンが私の部屋を覗きこむこと自体がはじめてかも知れない。今日は、はじめてだらけの日だな。
「てまちゃん、今日はありがとうね」
「なんのこと？」
優しい顔になった前島サンは、丁寧に言葉を繋いだ。
「僕は今日、僕が家にいることがわかってても、てまちゃんが友達を呼んだことが嬉しかった。前に友達と歩いている時に声をかけたら、逃げたでしょう？今度はちゃんと家族だって言ってもらったみたいで、嬉しかったんだ」
こういう話し方を噛みしめるように、って表現するんだっけ。前島サン、やっぱりあの時のことを気にしてたんだ。
「私こそ、あの時はごめんなさい」
3ヶ月も経って、やっと謝れた。
「前島サン、真赤だよ」
あ、本人に向かって「前島サン」って呼んじゃった。
「てまちゃんも赤いじゃない」
笑いながらドアを閉めた前島サンが、気にしたかどうかは知らない。

家族になれる―1

退屈な夏休みは続く。祖母の家に一度遊びに行って、小学校の頃の友達の何人かと会った。半年も経っていないのに、みんなと話が合わなくなっている。そうか、学校の友達って学校が一緒だから楽しいんだな。

「新しいお父さんにギャクタイされたりしない？」

冗談めかして、興味津々に聞いてきた子がいた。確かにニュースなんかではそんな話もある。

でも。

冗談にしても、イヤな冗談。ここで私が「されてる」なんて言ったら「やっぱりね」なんて言われるんだろうか。

これはきっと怒っていいことだ。だって、前島サンは一生懸命私と家族になろうとしてくれてる。そんなことは私にだってわかってる。だから本人がここにいなくたって、怒らないと前島サンにとても失礼だ。

「冗談でも、ギャクタイなんてされない。そんな人じゃない」

悔しくて、泣きそう。

「冗談じゃない。本気で怒らないでよ」

笑いながら言った、多分もう会わない友達を不愉快にさせるより、私には大事なことに思える。とりなしもしない他の子たちにも腹が立ってしまい、早々に別れた。

祖母の家に戻ると、一緒に来ていた母が「早かったね」と私に声をかけた。

「もう話が合わないし、いいや」

そんな風に答えたけど、なんだか友達よりも前島サンを選んだみたいで、それも不愉快。放っておいて欲しいっていうのが、一番近い

かな。特別なことをしてるって思って欲しくないだけ。
母が私の表情を読んでいるのがわかる。
「友達と何かあった？」
「何もない。離れちゃったから、話題がないだけ」

帰りの電車の中で母の横に腰掛けたら、母が沈んだ声で言った。
「お母さんが結婚して、一番しんどい思いしてるのは手毬だね。ごめんね」
今度は、ちゃんと言える。顔を見ながらじゃ言えないかも知れないから、前を向いたままだけれど。
「しんどくても、イヤじゃないから。前島サンもキライじゃないから」
ほら、言えた。
「ありがとう」
母の声は、少しかすれていた。私の父が生きていれば、これは全部おこらなかったこと。記憶にすらないのに、私の生活のすべてにかかわってくる父の不在が、今頃大きくなるなんて。生を授かることと、生活を共にすることはイコールじゃないのに。

家族になれる―2

８月も半ば、夕食が済んでリビングでテレビを見ていたら、前島サンに「本屋に行こう」と誘われた。そんな風に誘われたのは初めてで、当然母も一緒だと思ったら、母に立ち上がる気配は無い。

「一緒に買物に出たこと、ないじゃない。行こうよ」

そう言われてみれば、そうだな。

「ハードカバーで買ってくれれば、行く」

中学生がハードカバーの本なんか買ったら、一ヶ月のお小遣いは半分になっちゃう。マカセナサイ、とそのままビーサンをひっかけようとした前島サンを慌てて止める。

「着替えてきて！その格好で外に出ないで！」

「なんか、麻子さんがふたりいるみたい」

ジーンズにウォレットチェーンなんかガチャガチャさせてる前島サンとショートパンツの私。並んで歩いていると、どう見えるんだろう。親戚の叔父さん？サークルの世話役と会員？援助交際とかのアヤシイ関係に見えたら、気持ち悪い。

なんでいきなり、一緒に本屋に行こうなんて思ったんだろう。誰かに会ったりしたら、紹介しなくちゃいけないだろうか。あ、でも、母と一緒のときに友達に会っても「うちのお母さん」なんて言ったりしないな。そう思うと、結構気楽。そうか。隠すのと、自分から言わないのって違う。

「てまちゃん、赤ちゃんね、女の子みたい」

「生まれてないのにわかるの？」

お腹の中を見ることができるらしい。なんだか、不思議。なんだか、まだピンと来ない。

「パパだね。嬉しい？」

暗いからよくわからないけど、きっと今、照れくさそうな顔してる。
「てまちゃんも姉の立場になるんだけどね」
なんだか前島サンと母の妊娠がセットだったので、私は違うような気がしてた。でも、同じ母のお腹から産まれるのだ。妹、か。姉妹ができるって、なんかくすぐったい。

大型の書店だったので、あれこれ迷ってしまった。翻訳のファンタジーを2冊見較べて、どちらにしようか考えていたら両方買ってくれるという。
「ありがとう！太っ腹！」
「今、お腹が太いのは麻子さん。僕はまだメタボじゃありません」
「お母さんにそう言ってやろ」
会話がとても楽なのは、家の中じゃないからかも知れない。
「次から、2冊いっぺんなんてお金は出ないからね。今日は特別」
「なんで特別？」
「てまちゃんが僕につきあってくれたから」
前島サンはちょっと笑った。
「目の前で選んだものを買ってやるなんて、お父さんぽくない？やってみたかったの」
返す言葉に詰まって、抱えた紙袋が急に重くなった。

家族になれる―3

ついでにコンビニでアイスまで買ってもらって、ぶらぶらと歩いて帰った。前島サンは私に「お父さん」と呼ばれたいのかな。私の頭の中はそれで一杯になってしまって、なんだか話が上の空。家に着いた頃には、パンクしそうだった。

「おかえり。どんな本買ったの？」

母がソファでお茶を飲みながら話しかけてきたので、私も麦茶のポットを持ってリビングに座る。前島サンはシャワーを浴びるためにバスルームに入っていった。

聞いてみなくちゃ、前島サンがバスルームから出てくる前に。

「私、前島サンのことをお父さんて呼んだほうがいいの？」

私はとても困った顔をしたのだろう。そうねえ、と母は少し考える顔になった。

「少なくとも、前島サンはおかしいわね。手毬も前島サンだしね」

母が考えている間に、バスルームが開く音がした。カラスの行水だね。髪を拭きながら、前島サンはリビングに入ってきた。

「手毬が徹君をお父さんって呼ばなきゃいけないかって言ってるんだけど」

母があっさりと前島サンに話を振った。本人に直球で聞けないから、母に聞いてみたのに。前島サンは面食らったみたいな顔をした。

「てまちゃんが僕をそう呼ぶの？」

そんな言葉を聞いて、私が勘違いしてたことがわかって恥ずかしくなった。

前島サンはずいぶんと真剣な顔で私を見た。

「さっき、お父さんぽいことなんて言ったの気にした？ごめんね。無理にそう思わなくていいんだよ」

それから、母のほうを向いて「麻子さんも聞いてね」と話を続けた。

「僕は、てまちゃんの保護者にはなっても、お父さんと違うような気がする。てまちゃんはもう中学生になっちゃってるんだし、僕の影響下には多分いないと思う。だから、呼び方なんて本当はどうでもかまわないんだけど」

前島サンはそこで一息ついた。

「もうじき子供が生まれるし、僕はそれをとても嬉しく思っているから考えてたことがあってね。僕をお父さんなんて呼ぶように言ったら、僕はてまちゃんのお父さんに失礼な気がするんだ。てまちゃんのお父さんは、ずっとお父さんでいたかっただろうし、僕が横取りした形になっちゃう」

とても真剣な口調。

「徹君は手毬の父親にはなりたくないってこと？」

母が強い口調で口を挟んだ。

「なりたいと思って、努力もしてるつもりだけど。麻子さんもてまちゃんも、わかってくれてるでしょ？」

うん、わかってるよ。私もそれはわかってる。

「手毬は徹君が言ったことを理解できる？」

お鉢が私に回ってきた。相談したのは、私なのに。

家族になれる―4

頭がぐるぐるする。理解できたのは「お父さん」と呼ばなくてもいいってこと。でも母と結婚したんだから、当然父なんだと思うんだけど。

「あのね、てまちゃん」

前島サンは私の顔を覗きこむように言った。

「親と子供が揃ってれば家族ってわけじゃないでしょう？違う形の家族もあるって僕は思ってるんだけど」

「よく、わかんない」

母に助けを求めようとしたんだけど、母はまた別のことを考えてるみたいな顔をしてる。指を組み合わせてその上に顎を乗せる、何かを言いたい時の母の癖。私が相談したかったのは、前島サンを何て呼べば良いかだけだったのに。ここで「家族のありかた」なんて話したくない。だって、私にはわからないもん。

「徹君、手毬が混乱してるから、その話はまた今度」

母が助け舟を出してくれたので、少しほっとする。

「手毬が徹君になんて呼びかければいいか迷ってるなんて気がつかなかった。ごめん」

母は話を本題に戻した。

「確かに、前島手毬が前島徹を苗字で呼んだらヘンだよね。名前じゃダメ？」

大人の男の人を名前でって、呼びにくい気がするんだけど。徹さん？徹君？徹ちゃん。口の中でブツブツ言ってたら、前島サンがくすぐったそうな顔をした。

「てまちゃんと麻子さんの声が似てるから、なんか不思議な感じ」

「てまちゃんが呼びたいように呼んでくれたらいい。できれば、呼

び捨てじゃないほうがいいなあ」
いくらなんでも、呼び捨てにはしない。
赤ちゃんが生まれて、家族の呼び方がバラバラだと困らないかなあ。そう言ったら、言葉を理解するまでに一年近くあるよと笑われた。
「その時までに何らかの形になるんじゃない？麻子さんをお母さんと呼ぶのだって、強制じゃないでしょ？」
焦る必要はないんだからね、そう言いながら前島サンは私の髪を掻き混ぜた。子供にするみたいなことで、本当はあんまり嬉しくないんだけれど、黙って髪の毛をくしゃくしゃにされていた。
そして、ぼんやり「親と子供が揃ってれば家族ってわけでもない」ことについて考えようと思っていた。

新しい人を迎える―1

最後の宿題追い上げ一週間で夏休みが終わり、入れ替わりのように母が産休に入った。私は、１０月に開催される文化祭に出品するための作品を作らなくてはならない。夏休みに何も考えなかったツケが回って、今頃デッサンを始める。グリフォンとかケルベロスとかを描きたいな、と思っていたんだけれど、空想画ってびっくりするぐらい構図が浮かばない。

夏休みに少しでも考えとけば良かった。

学校から帰ると、毎日母が家にいるのが慣れない。学校で何かあった？なんて聞かれても、毎日答えるような事件なんてない。授業中に聡美とおしゃべりしてて先生に怒られたとか、絶対言わないし。

家の中は少しずつ赤ちゃんを迎える準備が始まっていて、家に帰ると母がベビー用品店の紙袋をごそごそと整理していたりする。

全部びっくりするくらい小さくて、見ているだけで楽しい。赤ちゃんを入れて歩く籠（クーファンとかいうらしい）なんて、温泉なんかにある脱衣籠よりも小さいくらい。女の子らしいので、全体的に淡いピンク色。

「お母さんが入院したら、おばあちゃんが来てくれることになってるから、心配しなくていいよ」

助かった。私がお洗濯も料理もしなくちゃいけないかと思っていた。前島サンの料理の腕はまったく上がっていないし、洗濯物を干しながら母に文句を言われてる。夕食の後、食器下げるときに油モノとそうでないものを重ねちゃうし。私にまで指摘されて「麻子さんがふたり」と呟く前島サンは、子供みたいでおかしい。

徹さんと呼ぶと私も照れて、呼ばれる前島サンも照れて、これが自然になるころにはもう赤ちゃんがいるのかなと思う。

「赤ちゃん、私も抱っこしたりミルクあげたりしていい？」
当然、と母は笑いながら返事をした。
「徹君より手毬のほうが頼りになるかも知れないね」
そう言われると、姉になるんだって楽しみになる。電車の中とかでたまに見る、泣いている赤ちゃんはとても声が大きい。やっぱり、うるさかったりするのかな。ブサイクだったら困るな。ちゃんと可愛いって思えるだろうか。

新しい人を迎える―2

雨の日の図書室は、いつもより人が多い。いつもの出窓の席に座っていたら、委員会の日じゃないのに司書の先生に手伝いを頼まれた。今日こそ、砂漠で黄金を守るグリフォンの絵を思い浮かべたかったのにな。

返却本を書架に戻していたら、珍しく聡美が顔を出した。ソフト部は、雨の日でも廊下でトレーニングしてるはずなんだけど。

「生理の二日目だから、休んだ」

あっさり口に出す聡美にびっくりした。私はまだ、誰にも言えない。

「手毬のお母さん、もうじき赤ちゃんが生まれるんでしょ？」

「なんで知ってるの？」

「夏休みにスーパーで会ったから。お父さんと一緒に買物してた」

お父さんって前島サンのことだろうな。親と一緒に買物に行って、お母さん同士が挨拶すればすぐにわかっちゃうことなんだ。知られたくないって精一杯思ったって、同じ地域で生活してるんだから。私の図書室の仕事にキリがついたところで、聡美と一緒に帰ることにした。

「手毬のお父さん、若くて優しそうでいいなあ」

聡美はみゅうと同じことを言う。羨ましがられることなのかどうか、わからない。

「聡美のお父さんってどんな感じ？」

「ウザい、うるさい、ダサい。人の話を聞かない。やせてるのにお腹だけ出てる」

聡美はポンポンと言い、にやっと笑った。それは前島サンには全部当て嵌まらないな、と思ったら少しだけ優越感。私の手柄じゃな

いけど。

私は母とふたりだけの生活が長かったので、母が体調が悪い時や良いことがあったことはすぐにわかる。それはきっと、家で見ている相手がお互いだけだったからなのだろう。急に家族が倍に増えようとしている今、母だけとの関わりの密度で接するなんて可能じゃない。赤ちゃんが来たら、きっと中心は赤ちゃんになる。母と前島サンと赤ちゃん。

あれ。私だけがはみだしてるみたいな気がする。母が産むんだから当然私の妹なんだけど、私は前島サンの子供じゃないし。なんだか、すっごくフクザツ。

新しい人を迎える―3

生まれるのは、母と前島サンの子供だ。知っていることと理解していることは違う。私は理解していなかった。そして、唐突に理解した。

今、前島サンと生活していても、私に生を授けたのは前島サンではなく私の父で私が今まで成長してくる過程を大切にしてくれたのは、父だ。覚えていないほど短い期間だったけど。病院のベッドの脇に私の写真を置いておくほどに、大切にしてくれていたのだ。前島サンが「お父さんと違う」って言ったのは、そういう意味だったんだ。

じゃあ、前島サンは？親子じゃなくても家族になれるって言った前島サンは、私をどう思っているんだろう。今まで、前島サンがいることに慣れなきゃってばっかり思ってたけど、前島サンも私がいることに慣れていないことに気がつかなかった。

嫌われてはいない、邪魔に思っていたりもしない、と思う。きっと、母や生まれてくる子供だけじゃなく、私も含めて「家族になれる」と言ったんだろう。

前島サンが母と家族になろうと思ったときに、私は母とすでに家族だった。もしかしたら前島サンこそが、疎外感を感じていたのかもしれない。

ただ、ひとつは覚悟しておかなくてはならない。生まれてくる赤ちゃんにとっての前島サンは、紛れもなく「お父さん」だ。ここまで育ってしまった私を見守るのと、何もできない状態から成長に関わって行くのとでは全然スタンスがちがう。だから、私の立ち位置はまだ未定のままだ。

以前、母が仕事で遅くなって祖母の家で夕食をとるとき、母はきまって「ごめんね」と言った。私はいつも「ふたり家族だもん、大丈夫」って答えた。なんでもない、普通のやりとりで。一緒に生活してるんだから、気を遣わなくてもわかってるって思ってたから。

自分の中にヒントを見つけた気がする。大事なのは、そんなことなのかも知れない。大丈夫、はっきりしないけど大丈夫だ。

新しい人を迎える―4

あれこれ試行錯誤をして下絵ができあがったある日、家に帰ると誰もいなかった。母は買い物かなと思い、宿題を始めようとしたところで玄関の鍵が開き、祖母が入ってきた。

「お母さん、入院したからね。きっと今晩中に産まれるよ」

祖母はにこにこしながら、スーパーの袋の中身を冷蔵庫にしまい始めた。

「前島サンは？」

あ、また前島サンって言っちゃった。なかなか慣れないんだもの。

「病院に行ってるよ。徹さんが出産するんじゃないかってほどオタオタしてる」

さもおかしそうに祖母は笑った。

祖母が買ってきたお菓子を広げて、差し向かいでお茶を飲む。いつもの母の席に、祖母。

「おばあちゃん、聞いていい？」

なに？祖母が私の顔を見返した。

「私が生まれた時、私のお父さんはどうだった？」

こればかりは、今の母には聞けない。

「徹さんよりは落ち着いてた。でもね、手毬のお母さんにありがとうありがとうって何回も言ってね」

祖母はちょっと目を細めた。

「毎日手毬をお風呂に入れるのを楽しみに帰ってきてたよ。手毬が寝てると、つついて起こしちゃったりしてね」

笑いながら、聞かなければ良かったと思う。これから、前島サンが同じ事をしたとしても、それは私にではないんだ。

夕食を終えた頃、電話が鳴った。

「五体満足ね？麻子も異常はないのね？」
祖母が確認して受話器を置き、私を振り返る。
「無事に生まれたよ、手毬。徹さんもこれから帰ってくるって。明日、一緒に病院に行こう」
祖母はいそいそした調子で言い、私にもそれが伝染した。そんなに小さい赤ちゃんを見るのは、初めて。

小一時間で前島サンが帰宅した。リビングに入ってきたと同時に、右手を差し出して、握手。腕をぶんぶん振られて、よろけたところを脇から支えられた。ついでにそのままハグの体勢。
「きゃあ！セクハラ！」
叫んでジタバタしてしまった。
「だって、嬉しいんだもん。てまちゃんにも一緒に喜んでもらおうと思って」
わかったわかったと身体を引き抜いたら、祖母が呆れた顔をしてこちらを見ていた。

「徹さん、手毬も年頃だからね」
祖母が言った言葉の意味はわからなくもなかったんだけど、私は別のことを考えていた。お父さんの感触ってあんな風なのか。もっと小さい頃、母にぎゅっとしてもらった感じと全然ちがう。私が黙り込んだのを見て、前島サンは誤解したらしい。
「ごめん、やらしい意味じゃないからね」
「わかってる。徹さんは嬉しくて踊りたいくらいなんでしょ」
私は前島サンに向かってにっこりして見せた。

新しい人を迎える―5

翌日、部活をパスして駅で祖母と待ち合わせ、産院に向かった。なんか、とっても不思議な雰囲気。待合室も廊下も女の人だらけで、お部屋のほうからは笑い声なんか聞こえちゃう。入院してる人たちは、みんなブカブカのパジャマを着てる。母の部屋に行く前に、赤ちゃんが並んでいる部屋の前に行った。ガラス越しに赤ちゃんが寝ているのが見える。

あ、「前島ベビー」の札。残念だけど、顔は見えない。

「あれ、手毬。今来たの？」

母の声が聞こえた。

「もうじき授乳時間だから迎えに来たのよ。ちょっと待っててね」

部屋に入って、とても小さなキャスター付きベッドを押しながら母は出てきた。中には、小さな小さな「前島ベビー（女）」だ。

「はじめまして」

ぎゅっと握った手が、びっくりするくらい小さい。顔は、誰に似てるんだかよくわからない。くしゃくしゃ。強いて言えば、遮光器土偶。廊下を歩いていると、赤ちゃんが泣きだした。思ったよりもずっと小さい声。

母のいる部屋にベッドは４つで、私が入って行った時にはみんなパジャマの前をはだけて、胸のマッサージをしていた。どっちを向いていいのかわからない。仕方なく目をやった母の胸は、私が知っている形じゃなかった。

「手毬、消毒してる間に抱っこしてごらん」

教えて貰って、祖母にゆっくりと赤ちゃんを腕に移してもらう。自分の胸のあたりから、ミルクの匂いがふわっと立ち上った。やわらかくて、あったかい。産着の隙間から覗く足は、私の掌の半分も

ない。
私の、妹。今私が手をゆるめて床に落としても、彼女は文句ひとつ言えないのだ。
はじめまして、よろしくね。今度は声に出さずに呟いた。

小さな赤ちゃんは、ミルクを飲んでいる最中に眠ってしまい、オムツをきれいにした後に、新生児室に戻された。とっても名残惜しいような気分。
「名前はもう決めたの？」
祖母が母に話しかけた。
「今晩、徹君ともう一度話してから。手毬とも相談するって言ってたよ」
私も名前を決めることに参加していいの？びっくりした顔をしていたら、母が笑いながら頷いた。
「みんなで育てていくんだから、みんなで考えるの」

新しい人を迎える—6

その夜も、とってもご機嫌に帰宅した前島サンは、祖母の用意した夕食を機嫌良くとり機嫌良く洗い物を済ませてから、機嫌良くバスルームに向かった。

「てまちゃん、相談事があるから待っててね」

名前のことかな。嬉しさの滲み出てる背中だなあ。そんなに嬉しいものなのか。

カラスの行水よりも早い時間でバスルームから出てきた前島サンは、やっぱり中途半端に着たシャツをひっぱり下ろしながら、麦茶をグラスに注いだ。食卓にレポート用紙を出し、あんまり上手とは言えない文字をいくつか書く。

「和」「絆」

なんだか、両方とも今風じゃない。祖母は今日は帰ってしまったので、私の意見だけになる。母の意見はどうだったんだろう。

「ふたつに絞ったよ。和って書いてなごみ。絆っていうのはわかるよね。」

前島サンがひとつずつ指差しながら説明する。

「お母さんと徹さんの意見は？」

「僕は、絆って名前をつけたい。だけど、あんまりダイレクトだって麻子さんに言われた」

絆って言葉に、きっと前島サンの決意があるんだってことはわかる。

「私は和がいいと思う。お母さんは何て？」

そう言うと、前島サンの顔が少し綻んだ。

「麻子さんと同じ意見だね。それね、麻子さんが考えたんだ」

母らしいと思った。私が馴染めなくて困っていたことも、ちゃん

とわかっていたんだろう。全員で和やかに生活する。
「多数決で決定、かな」
前島サンは、とても素敵な微笑み方をした。
なごみ。なごちゃん。
前島サンは口の中で何回か転がし、私もそれに倣ってみた。なんとなくふたりともバカみたいで、でも誰も見てないんだからいいや。

たった5日間で母は帰ってきた。これ以上はありえないくらい張り切った顔の前島サンが、迎えに行った。祖母がせっせとお祝いの支度をするのを手伝って、私もリビングを片付ける。祖父と前島サンのご両親もやってくる。
普段3人しかいないマンションが、いきなりとても賑やかになる。賑やかな部屋の中、眠っている小さな和を囲んでお祝い。
「手毬ちゃん、お姉さんになった感想はどう？」
前島サンのお母さんに話しかけられて、ちょっとドキドキしてしまった。
「徹は気がきかないから、よろしくね。麻子さんも女の子がいて助かったわね」
軽く責任を持たされた気がしないでもないんだけど、「はい」と返事をした。和の顔は、産院で見た時よりずっと赤ちゃんらしくなっている。
何日かで変わっちゃうものなんだ。

新しい人を迎える―7

赤ちゃんのいる日常は慌ただしい。祖母は平日に来て泊まっていったり帰ったりを繰り返していたが、それも二週間程度だった。母は常に眠そうで、私が帰宅するとリビングで和と一緒に寝ていることも多い。夜中に何回も起きなくてはならなくて、続けて眠れないそうだ。祖母が来てくれている間、祖母が洗濯や食事の支度をしてくれていたのだけれど、母に任せたらあまりにも大変で、私と前島サンも手伝う。祖母にずいぶん教えられたらしく、前島サンの洗濯物の干し方は幾分マシになった。

母が家事をしている間、和が泣きだすと「抱っこしてて」と母に渡されることがある。本を読んでいたり絵を描いていたりすると、面倒くさい。

でも、私が抱いて揺すると泣きやんだりするんだ。前島サンは抱っこがとてもヘタらしい。私が抱きあげて泣きやむ和を恨めしそうに見たりする。実は、私は内心得意だったりするんだけど。

「やっぱり女の子の方が赤ちゃんの扱いは上手なのかなぁ」

なんて軽くへこんでる前島サンは、ちょっと可哀想かも。

文化祭の準備で部活の時間が増え、委員会の時間も増えて私も忙しくなってきた。文化祭が終わるとすぐに中間考査が始まるし。和の顔は毎日ちょっとずつ変わってくる。

「手毬の赤ちゃんの頃とよく似てる」

母がミルクを飲ませながら、そんなことを言うのでちょっとびっくりした。

「私はパパ似だって言わなかったっけ」

「うん、おかしいね。だけど、本当によく似てるのよ」

写真の父と前島サンの見かけは、全然似ていない。

前島サンは和にすっかり夢中で、まだ使えない赤ちゃんの玩具なんか買ってきちゃう。それだけじゃ不公平だと思うのか、私にもケーキなんか買ってきちゃう。そんなことで赤ちゃんにやきもち焼いたりしないんだけどな、なんて思いながら、ケーキは美味しく食べちゃうんだけど。そして、やっぱり眠っている和のほっぺをプニプニつついてみたりしてる。

私の父が私にしたっていうことを、前島サンが和にする。前島サンの優しい表情を見ながら、思う。私も、あんなふうに可愛がられたんだ。

淋しいような嬉しいような不思議な感じ。でも、嫌じゃない。

学校に訪れる―1

文化祭の準備がますます忙しくなる。水彩画なので重ね塗りができず、パレットに作った色を紙の上にのせて調整するだけでも、どんどん時間が過ぎていってしまう。

図書委員は文化祭にあわせて委員推薦の本のレビューをいくつかあげなくてはならず、みゅうに一緒に文章を考えてもらったりしてる。

「最近、あんまり本読む時間がないの」

「それは一緒だよー。部活が終わったらヘトヘトだもん」

運動部の練習って、確かに大変そう。体育の授業よりずっと声を出してるし。

和は一ヶ月でずいぶん重くなった。そして、声が大きくなった。夜中に時々、寝室から私の部屋まで和の泣き声が聞こえる。母がキッチンでミルクをつくる気配もする。　私にまで聞こえるのに、同じ部屋の前島サンは気がつかずに寝ているとのこと。

徹君はノンキでいいわねぇ、なんてたまに母がちくっと言っていたりする。

ある日の夕食後、目を覚ましてキョロキョロする和の顔を覗き込んだら、嬉しいことがあった。もしかすると、一番乗り。

「お母さん、徹さん、なごちゃん笑ってる！」

どれどれと覗き込んだふたりの顔を見ても、和はもう知らんぷり。

「ちくしょーっ！てまちゃんに先越されたぁ！」

前島サンの悔しがり方がおかしくて、今度は私が笑ってしまった。

「まだ意味のない笑いなんだから、そんなに悔しがらないの」

母に宥められながら、和に声を掛け続ける前島サン。子供みたい

だな、と思ってから気がついた。
私、和の両親が母と前島サンだって、何の苦もなく受け入れているじゃない。そして、それが私の妹だって普通に思ってる。これってもしかしたら、すごいことじゃない？

翌週に文化祭が控えている。今年は母は来ないだろうなと思っていたんだけれど。
「徹君が手毬の絵を見に行くって言ってたよ」
もちろん案内も紹介もするつもりないけど、私の絵を見に来るの？
「手毬がどんなものを描くのか、見たいんだって」
前島サンが私の絵に興味を持つってことが、自分でもびっくりする感情を引き起こした。

嬉しい。

仕上げ、頑張らなくちゃ。

学校に訪れる―2

さて、文化祭当日。
美術室と図書室の受付で、時間が細切れになる。クラス展示のほうは運動部の子たちが主体になってくれているので良かった。みっつも仕事したら、一日が終わっちゃう。
時間が合わないから、みゅうと一緒には回れないな。見慣れた校内だから別にいいんだけど、なんか楽しみが減った気分。

美術室の前でペアの子と受付に座っていると、前島サンがにこにこしながら近寄ってきた。何も受付にいる時間に来なくてもいいのに。タイミング、悪すぎ。
受付に記名してもらいながら、思わず横を向く。
「てまちゃんの絵はどこ？」
外で、話しかけないで。これは前島サンが恥ずかしいからじゃなくて、多分母が来ても同じように思う。家の人を同級生に見られるって何で恥ずかしいんだろう。

私がとってもぶすったれた対応をしたので、顧問の先生が近付いてきた。
「前島、身内の方か」
記名を見ながらそう言って、前島サンに会釈をしたので、前島サンも頭を下げる。
「お世話になっております。前島手毬の父です」
気恥ずかしそうに、それでも父と発音した前島サンの顔をポカンと見つめてしまった。先生もずいぶん驚いた顔はしたけれど。あ、前島サン、赤くなってる。私も顔が熱い。
案内してこい、と先生に言われた。
「やですっ！名前書いてあるし！」

ここで自分の絵の前に、ふたりで一緒に立てる人なんて絶対いない。

美術室をゆっくり一周した前島サンは、私の絵の前でしばらく立ち止まっていた。先輩たちに比べると私の絵なんか全然ヘタクソだから、あんまりじっくり見ないで欲しい。見たいと思ってくれて嬉しいなんて、一瞬でも思った私がバカだった。

「じゃ、あと図書室に寄ったら帰る。ブックレビュー書いたんでしょ？」

「読まなくていい！」

わかったって言いながら、きっと図書室にもじっくりいるだろう前島サンの背中が歩いていく。

前島手毬の父です。耳の中にこだましてるみたい。

交代時間まで、私はペアの子とお喋りもしないで前島サンの言葉を反芻していた。

学校に訪れる―3

文化祭のあと、後片付けをして友達とのんびり帰ったら、ひどく遅くなってしまった。今日は遅くなると先に言っておいたので、お咎めはナシ。帰ったら、もう夕食の時間だった。

ひと目でわかる、前島サンの盛り付け。和の機嫌が悪いらしく、母は食卓の前で和を抱いたまま前島サンに指示を出している。

「助かった！着替えたら抱っこ代わって！徹君に任せといたらご飯にできない！」

なんだかひどい言われようをしてるね。大急ぎで着替えて、和を受け取る。普段なら泣いても多少放っておいたりしちゃってるんだけど、前島サンはそれを嫌がる。でも和は機嫌が悪い時は、前島サンの抱っこじゃ気が済まないのだ。正真正銘、パパなのにね。

和の機嫌が少し直って、ミルクを飲んでやっと眠ってくれたのは1時間後。おなかぺこぺこ。

「手毬、いい絵だったんだってねぇ。持って帰って来るの？」

頑張って仕上げたけど、他の人と比べたら、かなり見劣りしてたと思うんだけど。

「ブックレビューも良かったよ。内容をきちんと把握してる感じだった」

みゅうにもずいぶん手伝ってもらったもん。って言うか、前島サン、やっぱり図書室に行ったんだ。とても照れくさくて、少し嬉しい。

前島手毬の父です。

また、頭の中にその言葉が蘇ってきた。大丈夫。先生も友達も少し驚いてたけど、もう逃げない。

中間考査は、文化祭の一週間後にはじまる。なんて忙しさなんだ

ろう。学校のスケジュールってカコク。今年は文化祭の予定でズレたけど、本当はもっと前に終わる筈なんだって。自分の部屋で英単語をブツブツ暗記していたら、母に声を掛けられた。
「今日、徹君が遅いみたいだから、和を先にお風呂に入れちゃう。手伝ってくれない？」
だって今、勉強してるのに。１学期の期末考査で落とした順位の挽回しようと思ってるのに。

和は本当に可愛くて大切なんだけれど、ちょっと困る。暗記教科の勉強している時にリビングから泣き声が聞こえたり、本を読みたいと思っているときに、抱っこしててって預けられたり。自分の時間が圧迫されちゃう感じ。今までひとりっこだったから、そう思うんだろうか。
そう言えば、みゅうの部屋は妹と一緒で大変だったもの。聡美には「ウザい」お兄さんがいるんだっけ。家の中に赤ちゃんがひとり増えただけで、人口密度がぐっと上がった気がする。

立場が違う―1

中間考査の2日前の日曜日、私はとてもイライラしていた。気が散って上手く暗記できないのが和の泣き声のせいに思えてしまい、聡美と待ち合わせて図書館に行くと、グループ学習の席は満員だった。

ぜんぜんはかどらない。家に帰って前島サンがソファで眠っているのを見たら、腹が立ってしまった。私は思うようにいろいろなことが動かないのに、前島サンは呑気に寝てる。それはもちろん前島サンのせいじゃなくて、たまのお休みくらいお昼寝するだろうけど。和がも起きてもぞもぞと動いている。母は洗濯物を畳んでいる。

「なごちゃん、ただいま」

顔を寄せたら、ちょっと臭い。

「なごちゃん、ウンチしたみたいだよ」

そう言って自分の部屋に入ろうとしたら、母に呼び止められた。

「だって私、これから勉強するんだもん。徹さんが寝てるじゃない」

なんで勉強しなくちゃならない私が、和のオムツ換えなくちゃならないの。別にたいした時間をとる訳じゃないし、和のウンチはそんなに臭くない。だから、これは完璧なヤツアタリだ。気が散っているのは和や前島サンのせいじゃなくて、私が勉強したくないからなのだ。

「悪いけど、お願い。すぐかぶれちゃうから」

母は洗濯物を畳む手を休めずに言う。

「やだ。勉強する」

ただ、意地を張りたいために口答えをした。寝起きのボーっとした顔の前島サンが目に入った。

「徹さんに頼めばいいじゃない。パパなんだから」

「手毬にだって妹でしょ」
いつもの母なら、このへんで自分が立ち上がるのに、今日は折れてくれない。
「手毬に頼んだのよ。オムツ替えてあげて」
母の手は止まって、顔は私に向いていた。
「やだって言ったじゃない」

ひっこめようがなくなった言葉を前島サンが引き取った。
「麻子さん、強制するようなことじゃないでしょ。てまちゃんはイヤだって言ってるんだから、僕がそれくらいします」
これで私の主張は通った。不満がある筈はないのに。
「いいっ！私がやる！」
前島サンの言ったことが何故か余計にカンに触ってしまい、私は支離滅裂になった。自分でも何がどうしてイヤなのか、すでによくわからない。腹を立てながらオムツ替えシートの準備をしていると、前島サンに腕を掴まれた。
「僕がやるから、いい」
静かな口調で、別に怒っている訳じゃないのに、私は妙に怯んでしまった。母とは違う威圧感。

立場が違う―2

結局、前島サンが不器用な手つきでオムツを替えるのを、全部見ていた。そして、ホンの何分か前の出来事なのに、もう後悔している。

私は、なんで意地になったりしたんだろう。そして、母はなんで折れてくれなかったんだろう。なんだか悲しいみたいなワケのわからない感情の中で、私は黙って立っていた。

手を洗って戻ってきた前島サンは、膝の上に和を乗せながら私の顔を見た。

「勉強、しないの？」

それは本当に普通の声で、だから却って私が妙な意地を張ったことを自覚させられた。謝らなくてはいけないだろうか。私は謝るようなことをしたんだろうか。

手毬、と母の声がした。そちらを向くと、やはり怒った表情ではない母が私を見ていた。

「何で強く言われたんだか、わからないんでしょう？」

母の問いに、首を縦に振るだけで答える。

「お母さんとふたりだけの時は、全部手毬の都合優先だったものね。でも、もう違うんだよ。自分では何をして欲しいもまだ言えない和がいるし、徹君もいるでしょ。それが手毬の希望でいるんじゃないとしても、もう、ふたりだけの生活と同じようにはできないの」

言ってる意味はわかるかな、と母は私の顔を覗いた。

「だからね、優先順位っていうのがあることをちゃんと考えておいてね」

母の話はそこで終わった。そんなこと、言われなくたってわかってる。だからいつも、和を抱っこしてたり洗濯物取り込んだりして

るじゃない。口には出さなかったけれど、とっても不愉快。

「麻子さん、それはてまちゃんは理解してると思うよ」

口を挟んだのは、膝の上に和をのせて足を揺らしながらの前島サン。

「てまちゃん、イライラしてて口答えしたくなったんでしょう？」

ずばり言われて、それも返事に困る。

「でもね、その甘え方はまわりが不愉快になるから、やめたほうがいいよ」

あれって、甘えたことになるの？ちょっとびっくり。

前島サンの声は、いたって真面目だ。

「甘えるのはもちろんかまわないし、不機嫌な時があるのは仕方ないけど、向ける方向が違うでしょ」

前島サンにこんなこと言われたのは、はじめて。

「てまちゃんがしたのは、他の人にイライラを感染させること。わかった？」

うん、わかった。小さい声で返事したから、聞こえなかったかもしれない。自分の部屋のドアを開けて中に入ったあと、ベッドの上に座り込んでしまった。

叱りつけられるより、ずっと響いた。間違っていると諭されたことで自覚したことがある。前島サンは、私にそんなことを言うことができる立場の人なんだ。

叱られたり諭されたりする立場の私はと言うと。

少なくとも、不愉快じゃない。前島サンが私を嫌ってそんなことをするんじゃないって知っているから。

遠慮がいらない―1

中間考査の結果については、考えたくない。とりあえず、平均キープってところ。運動ができる子ほど成績がいいっていうの、不思議。部活で疲れて帰ったあと、勉強してるのかしら。まさかね。

家に帰ると和の面倒を見なくてはならないので、私はますます図書室にいる。雨の日には、やっぱりみゅうが一緒に図書室にいる。

「家に帰っても狭い部屋に妹が座ってるし、ケンカすると私ばっかり怒られるから」

姉妹でのケンカ、私と和では絶対にないな。部活がない日は、図書室で宿題まで終わらせちゃう。司書の先生ともずいぶん仲良くなれて、中学校の時に読んでいた本を紹介してもらう。

出窓の隣の席は、すっかり私の指定席になった。家以外に居場所があるのって、いいな。

秋の身体計測で、入学した時よりも身長が3?伸びていた。制服はまだ大きいけれど、膝下だったスカートが膝丈になった。教室で話す相手は増え、休みの日に約束するのはみゅうと聡美だけではなく、他のメンバーと行動する機会も多くなる。

文化祭の絵がきっかけになって美術部の中で空想画が流行し、部活の日に海外のファンタジーを紹介してくれと言われることも増えた。

入学した頃よそよそしかった学校は、いつの間にか新しい思い出を作る場所になっている。

時間だけじゃない、何か。

和の泣き声はますます大きくなり、最近はさすがの前島サンも夜中に目が醒めるらしい。ときどき笑ったような顔をすることが増え

てきて、そんなときはやっぱり可愛い。抱っこをして重さを感じるようになった。
赤ちゃんて、日に日に大きくなってゆく感じ。前島サンが上達したのか和が慣れたのか、多分両方なんだと思うけど、前島サンの抱っこで和の機嫌が直ることも多くなった。
そろそろ、ベビーカーで散歩をさせてもいいらしい。前島サンが張りきっている。

遠慮がいらない―2

前島サンと喧嘩したのは、とってもくだらない理由だった。私の雑誌が食卓に置きっぱなしになっていたので、土鍋の鍋敷きにされてしまったのだ。もちろん、普段はちゃんと鍋敷きを使うんだけれどちょうどいい大きさの雑誌がそこにあるって理由で、前島サンは躊躇なく土鍋をそこに下ろした。表紙は私の好きなアイドルグループで、それに思いっきり円形の跡がついた。

「なんで私の本にお鍋置くの！」

前島サンはまず、ごめんと謝ったけれど、その後言葉を続けた。

「でも、大事なものをそんなところに出しっぱなしにしてる、てまちゃんも悪いと思う」

「雑誌と鍋敷きは違うじゃない、徹さんが不精したんでしょ」

「ちゃんと自分の部屋に持っていかなかったてまちゃんは、不精じゃないの？」

冷静に言い返されると、却って腹が立つ。

「じゃ、除けといてくれたらいいじゃない！」

「それに関してはごめんって言った！でも、食卓は本を置くところじゃない！」

水掛け論ってこれのことなんだろう。

「手毬、あなたも悪い。徹君、大人気ない」

母が途中で声を掛けてくれなかったら、テンション上がって余計なことまで言うところだった。

「兄弟喧嘩みたいなこと、しないの。ご飯にするよ」

兄弟喧嘩？親子喧嘩じゃなくて？そういえば、母には一方的に食って掛かるほうが多いかも。で、喧嘩した後に顔をつき合わせて食事するの？

ぶすったれた顔でいたら、前島サンが食器棚から出したお箸と茶碗を私に差し出した。仕方がないから、受け取ってセットする。その横で、炊飯器のふたを開ける母。

喧嘩した後に普通の顔で一緒にご飯食べて、しかもその後リビングで同じテレビを見る。前島サン、お笑い番組見て笑ってるし。友達同士だって軽い口喧嘩の後ですら、すぐには一緒に座ったりできない。

前島サンが和を抱いてお風呂に行ったとき、母に話してみた。

「徹さん、ナマイキだって怒ってないのかなあ」

「一緒に生活してる人に、いつまでも腹を立てても仕方ないでしょ。嫌ってないんなら、言いたいこと言って忘れちゃえばいいの。それで解決」

そんなものなんだろうか。

「お母さんとだって、そうじゃなかった？」

確かに、母にお説教されても翌日は普通に喋ってる。

「遠慮がなくなったってことだよ。お腹の中に溜めるより、ずっといいでしょ」

それはそうだけど。

「徹君が同じ土俵で言い返すとは思わなかったけどね」

母がくすっと笑った時、バスルームから母を呼ぶ声が聞こえた。和がお風呂を終えたので、母が受け取りに行ったのだ。そのすぐ後にやっぱりすごいスピードでお風呂を終えた前島サンが、髪を拭きながらリビングに戻る。

「てまちゃん、あの雑誌いくらだった？」

前島サンの言葉に吹き出したのは、母だった。

遠慮がいらない―3

「兄弟喧嘩みたいなこと」のあと、前島サンはなんだかとっても近い人になった。思ったよりも大人らしくない、どちらかと言えば、父と兄の中間くらい。

父も兄も、知らないけど。友達の話に聞く「お父さん」ほど煩わしくもないし「兄貴」ほど張り合う存在じゃない。そして、私にとって最後に頼りになるのは前島サンじゃなくて、やはり母。母の夫なのだから外から見れば父の位置なのだけれど、私にはどうしてもそう思えないし、前島サンの存在は、それ以外の何かだと思わざるを得ない。

日曜日の朝、母は起きてこない。和はまだ夜中に何度か泣くことがあり、母の睡眠時間は常に足りないらしい。リビングで本を読んでいると、前島サンがのっそりと寝室から出てくる。新聞を前にしばらくぼーっとした顔をしてるんだけど。

十一月も半ばすぎ、起きだしてきた前島サンにいきなり「じゃんけん」と言われた。訳もわからず「じゃんけんぽん！」で、負けた。

「はい、僕の勝ち。てまちゃん、朝ご飯の支度」

「何それ？ずるい！もう一回！」

この日を境に毎週じゃんけんは恒例になり、母が起きだした時には少しだけ上達した前島サンの目玉焼きだとか、前島サン曰く「鳥のエサ」の私のサラダが食卓に乗っていることになった。

母が言うところの遠慮のない間柄っていうのは、まだよくわかってはいない。ただ家に前島サンがいることが、ごくごく当り前な自然なことで、一緒にテレビを見て笑ったり、休みの日の朝にじゃんけんしたりすることが、いつの間にか普通の生活の中に入っている。

前島サンが和の顔をつつきながら、時折母とひそやかな視線を交

わすことすら気持ち悪いことではなく、夫婦仲の良い証明のようで楽しそうだなと思うだけだ。

それでも、このふたりが子供をつくったのだと考えたくはないけど。

十二月になる頃には、和は人の顔を見て笑うことを覚えた。泣き声は前にも増して大きくなり、うるさくてテレビの音も聞こえないことがあるけれど、ご機嫌の時にニコニコと笑う顔は可愛くて、夢中になってあやしてしまう。手首にスポンジでくるまれた鈴をつけてやると、自分の手から音がするのが不思議らしくキョトンとした顔をするのがまた、可愛い。そして、リビングに和がいれば全員の視線は和に向いているので、キツい顔ができない。

一番小さいのに、存在感だけ大人よりもある。和を中心に、みんながまとまってる感じかな。

それぞれの形―1

私にはドキドキものの言葉だったのに、母にあっさり返事をされて、拍子抜けした。

「麻子さん」

そうやって、呼んだだけ。

「ヘンじゃない？」

「なんで？家にいる麻子は私でしょ。ママからお母さんに呼び変えた時だって、別に許可するなんて言ってないよ」

あれ、そうだっけ。母が一人称に「私」を使うこと自体が珍しい。

「徹君が名前なのに、私にだけお母さんなのがおかしい気がしたんでしょ？いいわよ、なんだって。違う人と変わる訳じゃないし」

ドキドキした分だけ、損した。

母とはもう、友達みたいな親子とは言われないと思う。前島サンが生活に入ってきたことで、母がそれまで私のレベルまで降りてきて、おしゃべりや遊びにつきあってくれていたことが、よくわかった。

対等な立場で仲が良いことと、行動そのものを同じにすることは違う。保護されていることに気がつかないほど、母は私に頼るフリをしてくれていたのだ。時々、育児休暇明けの仕事のことや保育園のことで前島サンと相談事をしている母の顔は、私に「どうしたらいいと思う？」なんて聞く時とは別の顔だ。

大人同士の会話というものがあるのだと、改めて知った。私は、そこにはまだ入れない。

二学期は和の泣き声と共にあっと言う間に終わり、クリスマスイブ。年末だから忙しいのにとかなんとか言いながら、前島サンは八時前に帰ってきた。前の日が祭日なんだから、無理に帰って来なく

たっていいのにと思うんだけれど、「クリスマスは家族で！」と強烈に主張する前島サンのために、母は泡の出るワインを用意した。
「徹さん、高校生くらいになったら、私も友達とパーティーとかするかも」
そう言ったら、ここでやりなさいと返事が返ってきた。保護者の前で友達とパーティーなんて、絶対にしません。

前島サンからのプレゼントは、金の細いブレスレット。ちょっと大人っぽい。
「ありがとう、大切に使う」
お礼を言ったら、前島サンは真っ赤になった。
「麻子さんのプレゼント買うより、迷った。使ってね」
母が、私は付け足し？と突っ込んで見せたので、笑ってしまう。
和はぱっちり目を開いてキョロキョロしたあと、話に参加してるみたいに笑った。

それぞれの形―2

明けて、元旦。よく晴れたお正月だ。

近所の小さな神社に初詣に行く。考えてみたら、４人で一緒に外に出るのは、今まで和のお宮参りだけだった気がする。やっぱり、中心にいるのは小さな和なんだな。寒いのに、ベビーカーの中でもこもこに包れた和は、ごきげん。最近、ちょっとだけシートを起しているので、まわりをキョロキョロしている。

途中で聡美に会う。やっぱり家族連れ。なんだ、「ウザい」お兄さんってカッコいいじゃない。

「手毬の妹？うわー、ちっちゃい！」

走り寄ってきた聡美は、和の手を触ってみながら新年のあいさつをしている親同士に視線を走らせる。

「やっぱり、手毬の家族っていいじゃない。みんな優しそうで、こんな可愛い妹もいて」

可愛いけど、最近始まった夜泣きで全員叩き起こされるんだけど。

「聡美のお兄さんだって、いいじゃない。背が高くてスポーツできそう」

見た目だけよ、と聡美は肩をすくめた。家の中のことって、外からじゃわからない。

神社で手を合わせてから、ひとりで行きたいところがあって、先に家に帰ってもらった。引っ越してきたばかりの時に見つけた土手。

４月にここに立っていた時、私は本当にひとりきりだった。母は遠くなり、前島サンは知らない人で、知っている顔なんてひとつもない場所に住み始めたんだから。

今、土手に花は咲いていない。枯れた草が風になびいているだけ。

春は春、なつはなつの
花つける堤に座りて
こまやけき本のなさけと愛とを知りぬ

犀川がどこにあるのか、まだ調べていない。本当の情けとか愛だとかがどんなものだか、私にはよくわからない。春になれば、ここにはまた花が咲く。桜が咲いたら、その頃にはベビーカーにちゃんと座れるようになる和も一緒にお花見しよう。

私の花つける堤で。

fin.

それぞれの形―2（後書き）

最後までおつきあいいただき、ありがとうございます。
思春期の始まりをちゃんと書けたのか、と自らに問えば、まったく自信はないというのが正直なところです。
これに続く反抗期まで書ききることはできず、手毬の話はこれにて一応の最終回とさせていただきます。

この物語に関しては「ちゃんと仕上げたい」悔いもございますので、もし宜しければ、ご感想・ご提言をいただけると、とても嬉しく思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4306p/

花つける堤に座りて

2011年1月23日21時25分発行